

# 看護学分野におけるエポニミー現象の分析

青木 仕  
順天堂大学図書館

## [はじめに]

科学における栄誉は研究成果のオリジナリティー(独創性)に対して与えられる。科学者たちは研究のプライオリティー(先取権)を獲得するために、他の研究者より逸早く研究結果を論文として学術雑誌に投稿する。エポニミー(Eponymy)とは、新しく発見・発明された科学上の法則、理論、単位、器具、病名、星の名前などに対してその発見・発明した人物の名前を栄誉として冠する現象をいう。論文の質を測る方法として引用分析が近年盛んに用いられている。しかし、引用分析は同時代の専攻分野を同じくする研究者からの評価に限られてしまう。それに引き換えエポニミー現象の分析は、時代、学界を越えた科学者の独創性の評価が可能ではないかと考えられる。この現象に最初に着目したのは、アメリカの社会学者マートンで、著書「The Sociology of Science」で科学の栄誉的褒章としてエポニミー現象が社会に承認された独創性の一つの指標に成り得るものと述べている。今回は、看護界のエポニミー現象を分析する。看護のエポニミーを分析することにより、看護学分野の独創的な研究が把握できるのではないかと考えた。

## [方法]

「看護学事典第2版. 東京:日本看護協会出版会;2011.」や「都留伸子監訳. 看護理論家とその業績. 第3版. 東京:医学書院;2004.」「看護理論集. 増補改訂版. 東京:日本看護協会出版会;2006.」など看護学を代表する事典や専門書から人名の冠してある理論や報告等のエポニミーを抽出した。

## [結果]

看護分野におけるエポニミーは24件でその内訳は、看護論16件、レポート3件、モデル3件、症候群1件、方式1件と看護理論が66.7%を占めていた。エポニミーの国別の内訳は、アメリカ21件、イギリス2件、カナダ1件とアメリカ人が87.5%を占めていた。

## [考察]

イギリス人のフローレンス・ナイチンゲール(1820-1910)は近代看護学の祖と位置付けられている。このように看護学の歴史は100年余りとまだ浅い学問分野であり、これから益々発展する領域であると思われる。今回の調査で明らかになったようにロイ看護論、ロジャーズ看護論、キング看護論など看護理論にエポニミー現象が数多く見出せた。この結果は看護学を一つの学問分野として成立させ大系化するためにも看護理論を構築する必要性があり数多く見出せたものと思われる。エポニミーの国別の内訳はアメリカ人が87.5%を占め、近代看護学の中心国はイギリスからアメリカに変遷し、今日の看護分野におけるアメリカの看護学の進展を象徴している結果であった。今後、我が国の看護学においても日本から創作され発信し世界が認めるエポニミーの出現が期待される。

**[参考文献]** 青木 仕. 医学におけるエポニミー現象に関する研究—症候群の分析—. 医学図書館. 1988;35(4):219-27.